

関哲行・踊共二著

『忘れられたマイノリティ』

——迫害と共生のヨーロッパ史——

一六世紀以降、宗教をめぐるヨーロッパの様相は大きく変化した。アルプス以北で始まった宗教改革はカトリック中心的な社会を破壊し、地中海諸国家では世界規模でのキリスト教布教が企図された。ヨーロッパ世界は「宗派化」され、強い結束力を持つ互いに対立しあう諸集団によって構成されることとなった。

以上が中世末期に起きた宗教的激震への概説的な理解だろう。しかしこれらの議論は国民国家やマジヨリテイ社会の支配的宗教を分析単位とするものであり、改宗・再改宗を繰り返し、追放や迫害のなかで広範囲にわたる移動を余儀なくされた宗教的マイノリティを掘りあげる議論ではなかった。本書はそのような「忘れられた」マイノリティの実態に迫り、中世末期から近世へと至る、世界が一体化を始めた時代のなかに、

彼らの動態を位置づけることを目的としている。

本書は全一章の二部構成となっている。序章では、ヨーロッパがキリスト教・ユダヤ教・イスラム教の共生と対立の世界として捉え直され、第一部（第一―三章）では民衆の信仰実践とその変化が概観される。

信仰実践には、前述の三宗教に共通する聖地巡礼の慣行や、キリスト教における聖人崇敬、動物を含む自然への「呪い」行為などが含まれる。これは厳格な一神教と見られがちなカトリックの「非キリスト教性」の指摘とも、「三つの一神教」の共通点の確認ともいえる。以上の概説のうえ、それが一六世紀以降どう変容したか通史的な解説が加えられる。

続く第二部（第四―九章）では、宗教的激震のなかで生まれたマイノリティたちに関して具体的な事例が示される。関哲行が地中海世界のムデハル（キリスト教徒支配下のムスリム）・モリスコ（改宗ムスリム）・コンベルソ（改宗ユダヤ人）について、踊共二がアルプス周辺地域のユダヤ人や改革派・再洗礼派など少数宗派信徒について、交互に研究を披露する。当該箇所は

対話形式のような構成を持ち、それによって読者は中世末から近世にかけて起きた大激震を、アルプスとイベリア半島とでパラレルに起こった現象として捉えることができるだろう。マイノリティ達は迫害を受け移動を余儀なくされながらも、峠道や農村など従来の議論では周縁的な扱いを受けていた領域で、ひっそりとマジヨリテイとの共生を果たしてもいたのだった。

さらに第八章以下では、サハラ以南に拡散するモリスコや、アメリカ大陸へと渡ったアーミツシュ（北米に移住した再洗礼派の一派）、終章では日本やフィリピンにおけるキリシタンの活動も組上に載せられる。スペイン、ドイツから始められた記述が、北米やアフリカに及び、遂にはアジアへと繋がる。小さな物語に落ち着きがちなマイノリティ研究を、宗教改革や世界規模の人的移動などといった大きな時代の流れに、見事に接続しているといえるだろう。

宗派化・規律化の面のみが注目を浴びがちな宗教改革は、多くのマイノリティを生み出す契機であり、イベリア半島での大規模な追放・改宗の波と時を同じくするものだった。本書のような研究はまだ緒につい

たばかりかと思われるが、東欧やロシア、イギリスなどを対象にした同様の研究の進展によって、より緻密でグローバルな「忘れられた」マイノリティ像が浮かび上がってくることを思われる。

(二〇一六年五月 二二一頁+二二三頁)

山川出版社 税別二五〇〇円)

(吉田暉 京都大学大学院文学研究科修士課程)

受贈誌

(二〇一六年八月二三日)

二〇一六年九月八日)

ANTHROPOLOGICAL SCIENCE (The Official Journal of THE ANTHROPOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN)

二二四—二二

成大歴史學報(國立成功大學歷史學系) 五

○

龍谷大学佛教文化研究所紀要(龍谷大学佛

教文化研究所) 五四

人文地理(人文地理学会) 六八—二二

日本歴史(日本歴史学会) 八二〇

東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研

究所) 六四

東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研

究所) 六五

EAST ASIAN REVIEW (The Asian

Research Institute) 一六

史迹と美術(史迹美術同致会) 八六七

国家學會雜誌(国家学会事務所) 二二九—

七・八

社会経済史学(社会経済史学会) 八二—二

立命館法學(立命館大学法学会) 三六六

経済論究(九州大学大学院経済学会) 一五

五

Journal of Northeast Asian History

(Northeast Asian History Foundation)

一三一—

南方文化(天理南方文化研究会) 四二

三康文化研究所所報(三康文化研究所) 五

一

編集後記

たいへんお待たせしておりましたが、ようやく一〇〇巻二号をお届けすることができました。ひとえに原稿をお寄せいただいた皆様、査読にご協力いただいた皆様のおかげです。厚く御礼申し上げます。その誌面には社会と公共性に焦点を当てた論説が揃いました。杉本論説は古代ギリシャにお

いて銀行家の人的紐帯がアテナイ社会に対して持った意義を論じ、島本論説は治水に関する広域支配をめぐって幕府と狭山藩の思惑のせめぎ合いを検討しています。また、白木論説は慣行的水利権と公法的契約の軋轢を詳細に論じています。対象とする時代、地域は様々ですが、共通する緻密な論証のスタイルは実証性を重んじる史林にふさわしいものとなっています。ご味読ください。(網島聖)

◆史学研究会ホームページ・アドレス

<http://www.shigakukenkuyukai.jp/index.html>

二〇一七年三月二十五日印刷
二〇一七年三月二二日発行

定価一、二〇〇円
史林 第一〇〇巻第二号(通算第五二二号)

京都市左京区吉田町京都大学大学院文学研究科内

電話 (〇七五) 七五三一・二七八七
FAX

発行人 史学研究会

振替京都〇二〇七〇二二五五番
理事長 井谷鋼造

印刷所 中村印刷株式会社
京都市南区上高畑薬田二九